

令和七年度

龍谷大学付属

平安中学校入学試験問題

受験番号

国語

解答上の注意

- 一. この問題用紙は「はじめ」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二. 答えはすべて解答用紙の決められたところに書きなさい。
- 三. 解答用紙の決められたところに受験番号を書きなさい。氏名を書いてはいけません。
- 四. 問題を読むときに、声を出してはいけません。
- 五. 問題内容についての質問は受けません。
- 六. 印刷が読みにくいときは手をあげて監督者を呼びなさい。
- 七. 「やめ」の合図があつたら、解答用紙をおもてに向け、問題用紙を解答用紙の上に置いて、回収が終わるまで席を離れてはいけません。(問題を持ち帰ることができません)

□ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

最近、テレビはもちろん、インターネットなどを通して、知識があふれるばかりに入ってきました。

「情報過多」の時代と言われますが、今やそれは「知識過多」といっても過言ではない。① テレビのクイズ番組に出たら、私などまったくお手上げでしょう。

でも、ちょっと考えてみてください。手に入れたさまざまな知識は、では一体、何の役に立っているのか。というより、そのようなことをいっばい覚えてどうしようというのか、と。

自分自身を確立し、自分をみがくのに、どういう役割を果たしているのか。もちろん、知らないより多くのことを知っているほうがいいに違いありません。無知なることが、一番怖いことですから。そして、いろいろなことを知っていれば、仲間との話題にも困らないし、仕事のつき合いの※潤滑油にもなるでしょう。

しかし、あえて聞きましょう。あなたは「もの知り博士」になりたいたのか、あるいはそうではなく② 「教養のある大人」になりたいのか、と。

私が大事だと思うことは、「知識」と「教養」とは違うということですよ。

テレビそのほかの影響もあって、「もの知り」と「教養」とを一緒くたにしている人がいるかもしれませんが、それは違います。

「あの人は博識だ」と言うのは、モノをよく知っていると意味では賞賛の言葉ですが、その人が人物として優れているかどうかはまた別の話です。

これに対して、「あの人には教養がある」と言う場合には、知識があるだけではなく、その知識を生かしたプラスアルファ

を持っている評価が込められているのです。

わかりやすくするために、ちょっと単純化してみますが、たとえば「日本に仏教が伝来したのは五三八年」と知っているのは「知識」です。あるいは「六四五年は大化の改新」という年号をすらすら言えるのも知識でしょう。

受験勉強で、仏教の伝来は「仏の前にゴミは(五三八)なし」、大化の改新は「蒸しご(六四五)はん、つくって願う大化の改新」などと一所懸命暗記した。

だけど、仏教が日本に来たことについていえば、仏教がどのようなに生まれて東進してきたのか——インドから起こってパキスタン、中央アジア、敦煌、朝鮮半島、そして日本と渡ってきた、大きな流れの中でとらえることができるのが「教養」だと思います。あるいはそこに、仏教美術の変遷までもふまえて話すことができる——③ それが教養人なのだと思います。

こう言うと、そこまでいくと専門分野の話じゃないのか、と思うかもしれない。でも、専門分野とは本来、もっと深く一つのことを探究するものでしょう。

かつて大学の教養学科というのは、この専門分野に進む前の一般教養を身につけるためのものでした。

A、歴史書には「どうやると物事は発展し、何をやるとダメになり、滅びてしまうのか」が書かれています。そのような事例を単なる知識として記憶するのではなく、お手本として学びながら自分の行動原理をつくり上げていく。

B、本来ならば、教養を身につけることは人間形成において非常に重要な部分を占めるはずのものです。C 残念なことには学生たちはこの教養課程を、ただ進級、卒業のための単位としか考えていない。

高校の延長程度の認識で、講義よりもアルバイトに忙しい学生もいるくらいです。特に頭が柔軟な若いときにこそ、教養の

蓄積ができるのに、なんとももつたいたいなとしか思えません。

ひとことではちよつと言ひ表しにくいのですが、知識の広がりともいうのか、一つの知識から※派生するさまざまなことをも知っていて、それを自分自身の中で生かしている人、それが教養人だと私は考えています。

教養が何より重要だということを、私は※大伯父から教わりました。

私の大伯父は清水南山といつて、東京美術学校の先生をしていた、当時、美術工芸家の第一人者とも言われた人です。

その大伯父が平素から話していたことは、

「美術学校に必要なのは、*だ」

ということでした。大伯父は美術学校で教えた経験から、そう結論づけたのです。

というのも、美術学校に入ってくる、「絵は上手だけれども、ほかの勉強は嫌いだ」というような学生たちは、技術的には確かに優れていても、そこから先へは進めなくなることが多かったからです。

本当の創作家となっていくためには、※小手先の技術だけではどうしても頭打ちになってしまう。技術の上に創造性や独自性といった、まったく別のものを生み出していく力を持たなければ、本当の芸術家にはなれない、ということに大伯父は気がついたということです。

技術だけがうまくても、それは専門バカにすぎない、と。そして私に「技術だけがいかに優れていても、そこに教養が伴わなければ、真の画家にはなれない。自分で考えるだけの教養がなければ、ものは生み出せないからだ」と教えてくれたのです。

しかし、大伯父のいう「教養」が本当にそれほど重要なものなのか、当時一〇代の私には理解できませんでした。

でも、私は素直に大伯父の話を受け入れ、わからないなりに、

教養を身につけようと努力しました。

そして実際、それから人生のさまざまな場面でこの努力がムダではなかったこと、大伯父の言葉が本当に正しかったことを実感したのです。

これは、どんなジャンルのことにも当てはまると思いますが、誰でもどこかで壁にぶち当たります。特に若い時代、修行中の時代には、どうやってうまく行かないことが多々出てくる。乗り越えなければならぬとわかっていても、やればやるほど逆戻りしたりするものです。一歩手前まで来ているとわかっていても、その壁を破ることができない。焦りや不安で、夜も眠れなかつたりするときもあるでしょう。

後々、人生を通観したときに、そこが分岐点だったという場合もある。こういう④人生の岐路において最も役立つのが、実は「教養」なのです。

まだ人生の発展途上の人には、ピンと来ないかもしれませんが。それはそうでしょう。人生でこんな問題が起こったら、こういう教養が役立つ、別な問題のときには、こっちのものが役立つ、といったように受験勉強のようなわけにはいかないから。

でも、私の大伯父も、そして私も、長い人生のなかで実感として教養の重要性を感じた。この事実は大きいと思います。

新しいものを生み出す力、それが教養なのです。そしてここが重要なポイントなのでくり返しますが、この教養を身につけるのは若くて頭がまだ柔軟なときが最適だということです。

美術学校に合格し、私がいよいよ広島から東京へ出発しようというとき、大伯父が「郁夫よ、これだけは忘れるな」と話してくれた三つの心構えがあります。

⑤そのうちの一つが、「古典を学べ」ということでした。

「古典を学ぶというのは、ただ単に日本のことだけを考えるのではなく、さらにその文化の源流まで学びなさい。また、東西

のいろいろな古典に学び、とりわけ東洋のものをよく勉強しなさい」

D、「古典の勉強と同時に、自然をよく見ることも大切だ。写生を
どんでんして自然から学びなさい」
とも加えました。

私は美術学校へ入ってから、この教えを守りました。朝は早く起きて読書、昼間は学校へ行って実技や講義。そして、夜はまた四〜五時間、本を読むという毎日でした。

あとで学生時代のお酒にまつわる話もしますが、全般を見れば自分でも非常に真面目な学生生活を送ったと思っと思っています。その原動力は、とにかく⑥自分に足りないものを早く埋めようという必死の思いでした。それというのも、今はもうそのような制度はありませんが、私の時代には旧制中学校から旧制高校や美術学校への「飛び級進学」というのがあったのです。

そして、私は運良く、この飛び級で普通の人よりも一年早く美術学校に入れた。

当然、クラスでは最年少です。当時一六歳の私には、周囲の同級生がまるで大人に見える。事実、戦後の混乱期でもあり、戦時中に学校へ行けなかった人や外地から引き揚げてきた人など、二〇代も後半の同級生もたくさんいたのです。

そんな同級生たちが知っている基本的なことさえ私には身につけていないことを、まざまざと見せつけられる毎日だったのです。

地方から東京へ出てきたばかりでもあり、私は同級生との差をつくづく感じた。

そこで、その差を何とか埋めなければ、と一所懸命だったのです。

東大の学生だった兄と同じ下宿に住んでいたので、手始めに

兄の本を借りて読み出しました。大伯父の教えを思い出し、古典や世界文学、歴史の本と読み進めていったのです。

なぜ、大伯父は私に「古典を読め」と言ったのでしょうか。それは、私たちが描く各々の作品には、それを描いた人の人生が表れるからです。

これはもちろん絵のことだけではありません。どんな仕事をしていても、その人が描き出す人生はその人生観によって支えられている、といったほうがいいでしょう。

そして、自分という作品を一過性のもので終わらせるのではなく、時代を超えて人々に愛されるためには、やはり、その人生観が新旧をも越えたオーソドックスなものでなければなりません。

古典というのは、そういう⑦普遍性を持ったものなのです。だからこそ今なお輝いているのであり、その輝き続ける理由を学ばなければならぬのです。

絵の世界で言えば、水墨画の⑧雪舟も、『風神雷神図』で有名な⑨俵屋宗達も、当時の時代を反映する様式ではあっても、彼らの人生観、主張はまったく古さを感じさせません。

この二人は確かに先人から多くものを学んだ。けれども、先人の枠にはまるのではなく、そこから探究に探究を重ねて、自分のスタイルをつくり上げたのです。これに対して後代の画家の多くは型にとらわれて、結局はそこから一歩

出ることができず、新しいものを生み出すことができなかった。その違いは、先人たちの多くのものを教養として学んだのか、模倣するにすぎなかったのか、だと思えます。

雪舟や宗達は古典を教養として学んだから、「ぶれない自分」をつくれたのです。

(平山郁夫 『ぶれない』)

※(文中のことばの意味)

潤滑油 … なめらかに、うまくいくようにするもの。

派生する … もとになるものから分かれて生じる。

大伯父 … 祖父母の兄。

小手先 … その場のしぎ。

普遍性 … すべてのものにあてはまる性質。

雪舟 … 室町時代の画家。

俵屋宗達 … 江戸時代初期の画家。

模倣する … まねをする。

問 1

最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- 問 1 A D にあてはまることばの組み合わせとして、
- | | | | | |
|---|--------|--------|--------|-------|
| ア | A たとえば | B ですから | C ところが | D また |
| イ | A さらに | B そして | C なので | D つまり |
| ウ | A つまり | B けれども | C だから | D さらに |
| エ | A また | B たとえば | C さらに | D かし |

問 2

線①「テレビのクイズ番組」とありますが、「ク

イズ番組」が見る側にとどのような影響を与えると、筆者は考えていますか。「人がふえること」につながるように、文中から二十五字以内でぬき出しなさい。句読点なども字数に数えます。

問 3

線②「『教養のある大人』」とありますが、「教養」

とはどのような力ですか。「教養とはく力である」の形に合うように文中から十字でぬき出しなさい。

問 4

線③「それが教養人なのだ」とありますが、筆者

の考える「教養人」についてまとめられている形式段落をこれより後の部分からさがし、はじめの五字を答えなさい。

問 5

* にあてはまる最もふさわしいものを

次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | |
|---|---------------------|
| ア | もうすでに専門家と認められていること |
| イ | 技術だけを巧みにみがき上げた専門バカ |
| ウ | 勉強は嫌いでも絵だけは上手に描けること |
| エ | 一般の大学へも入学できるような学力 |

問6 ———線④「人生の岐路」とありますが、それはどのような場面ですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人生のさまざまな問題に役立つ教養をどうやって身につけるかを考える場面。
- イ 乗り越えられない問題にぶち当たり解決を求められる場面。
- ウ 教養を身につけて努力しなければならない人生のさまざまな場面。
- エ 若くて頭が柔軟なときに受験勉強をして、自分の将来を決めていく場面。

問7 ———線⑤「そのうちの 하나가、『古典を学べ』ということでした」とありますが、大伯父がこのように言った理由を説明した次の一文にあてはまることばを、Iは文中から三字でぬき出し、IIは十字以内で答えなさい。

古典は、作品を作ったそれぞれの人々の I が表れるものであり、 II を持ったものであるから。

問8 ———線⑥「自分に足りないもの」とありますが、それはどのようなことですか。文中から二十字以内でぬき出しなさい。

問9 ———線⑦「ぶれない」とありますが、これにあてはまらないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 古典に学びながら枠にははまらず、自分のスタイルを作り上げること。
- イ 古典の型にとらわれず、時代を超えた人生観を作品に描き出すこと。
- ウ 先人からの枠と型を学び、多くのことを模倣すること。
- エ 先人から、普遍的な人生を学ぶこと。

問10 本文の内容として、ふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 生きていく上で必要なものは「教養」であって、「知識」は何の役にも立たない。
- イ 「あの人には教養がある」と言う場合は、人物として優れているという評価を含んでいる。
- ウ 勉強が嫌いな美術学校の学生は技術を磨きさえすれば、教養がなくても本場の芸術家になれる。
- エ 教養はいつまでも身につけることができるので、学ぶ時期に遅いということはない。
- オ 雪舟や俵屋宗達は教養を身につけたために、自分の表現スタイルをつくり上げることができた。

① 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

さくらは中学受験に向けて勉強に励む小学六年生である。普段、母の泉と二人で生活しており、父が帰ってくるのは月に一度だ。二人の食卓に並ぶのはいつも泉の作った料理ではなく、買ってきたお惣菜ばかりでさくらは物寂しさを感じていた。ある日、調理実習で作ったスクランブルエッグが絶賛され、料理に目覚めたさくらは、母から受験と両立させることを条件にキッチンに立つ許可を得た。オムレツをマスターしようと試行錯誤するが、なかなか上手くいかずに焦っていた。

① 暖かいはずのダイニングに漂うのは凍てついた空気だった。

おびえる子ウサギのような心持ちでさくらは座っていた。向かい合う泉は冷やかな目つきでさくらを見ている。お互いに黙りこくったまま時間だけが流れ、耐えがたさに溺れそうになりながら細く呼吸することしかできずにいた。

「パソコン、ばれなければ私に黙って使っていていいと思ってるの？」

よどんだ水に石が乱暴に投げ込まれた、そんな心地だった。泉の声から感じられるのは怒りだけだった。

「……ごめんなさい。もう勝手に触りません」

「これからは使うのも禁止。約束を守れなかったんだから当たり前前よね」

もうオムレツの動画は見られないということだ。なんとか弁解しなかったけれど声を出すことはできなかった。パソコンの電源を切り忘れて家を出た日に限って、母の帰宅が早かったのは運が悪かった。けれど約束を守ってさえいればよかったのだ。悪いのは自分だと、嫌というほどわかっている。

「それから、もうひとつ。成績が落ちたら料理はやめさせるって言ったの、忘れてないよね？」

消え入りそうな声で「はい」と答える。

「勉強の時間削ってまで毎日卵焼いて、私の目を盗んでパソコン使って、友達の家料理しに行つて。で、② その結果がこれ。わかっている？」

目の前に突きつけられた紙をおそろおそろ受け取る。もう二度と見たくない、けれど受け取らないわけにはいかなかった。紙を開いて合格判定の欄をちらりと見やると『B』と印字されている。ずっと『A』を取り続けたのに、このタイミングで判定が悪くなっているのだ。合格が望めないわけではないけれど、こうしてはつきり見せつけられるのはただただつらかった。

「この時期に伸びる子と伸びない子では受験本番の結果も全然違うからね。今までがよくても、直前になって負けたらなんの意味もないでしょ？ 本番まで一ヶ月ちよつとしかないのに、こんなことで合格できると思ってるの？」

模試の結果をさくらに渡した泉はキッチンへと入っていった。しばらくして※ケトルに水を入れる音が聞こえてくる。夕食前なのにコーヒーを淹れるつもりだ。母はかなり苛立っているのだろう。

さくらは逃げ出したい気持ちをこらえて自分の成績をしつかりと見つめた。点数だけを見れば、過去の模試と比べても大して変わっていない。けれど総合順位と偏差値は落ちている。他の生徒に抜かされたということだ。

対抗心を隠そうともしない※薫の姿が③ 脳裏をよぎった。本気で合格するのだと宣言した薫の覚悟は本物だったのだ。

「でも見てよ、点数は落ちてないよ。私ずっとこれまで通りに勉強してたんだよ。勉強時間を減らしたんじゃないやなくて、寝る時

間を十分だけ遅くしてたの」

③置かれた状況を理解してはいたけれど、なんとか取り繕おうとした。自分の成績がひどく落ちたわけではなく、周りが上がっただけなのだから見逃してもらえろかもしれない。

「順位が落ちてるんだから点数が同じだろうと関係ないよ。いい？ 平均点が上がってるから偏差値が落ちたの。みんなが点数を取れる試験だったってこと。それなのにさくらはいつもと同じなんだから、成績が落ちたのと変わらないじゃない」

母の目はごまかされなかった。そんなのずるい、と心の中で毒づく。元々の点数は維持しているのに、後から伸びてきた者がいるだけで成績が下がったことになるのが、**⑥**理不尽でたまらない。こんな形で料理をやめさせられたくない。

「じゃあ来月の模試は塾の上位者名簿に名前が載るように頑張る。勉強の時間も一時間増やすよ。だから料理はもう少し続けさせてほしいの、お願い」

必死で食い下がった。塾の模試では総得点順位の上から十パーセントを発表する成績上位者リストがあり、それは毎回廊下に大きく貼り出される。塾に通っている誰もがそのリストに自分の名前を載せようと、**⑦**しのぎを削っていた。さくらは過去に何度か名前が載ったことがあり、薫からの視線を強く感じるようになったのもそれからだった。

どんなに料理を続けたくても、この状況では聞き入れてもらえないかもしれない。けれどまだ終わるわけにはいかない。勉強も料理もきちんと結果を出せるのだとどうしても証明したかった。

「約束が違うでしょ。さくらの成績が落ちたことは数字として証明されたんだから料理はやめてもらいます。お父さんに聞いても同じ答えだと思うよ」

「でも、」

「でもじゃないでしょ！」

衝撃がさくらを貫いた。大きな声を張り上げた泉が、カウンター越しにさくらを強く見据えていた。母に怒鳴られたのはいつぶりだろうか。動けないでいるさくらに向かって、泉はさらに続けた。

「パソコンといい成績といい、約束もろくに守れないの？ 前はこんなことなかったのに、料理始めてからおかしくなったよね。そろそろ現実を見て受験に集中しなさい。だいたいね、前からずっと言いたかったけど料理料理って一体なんなの？ 私が作らないことに対する当てつけのつもり？」

すう、と体温が下がる感覚にとらわれ、さくらの顔から表情が消え失せた。それと同時に、泉の顔に焦りの表情が浮かぶ。

あ、と小さく呟いた母の声を聞き逃さなかった。けれどそんなことに構っていられる余裕はなかった。

④コツンと投げ込まれたひと粒が、心に積もり積もった小石の山をがらがらと崩していく音を聞いた。両親との約束も挑戦のための覚悟も、なにかもが激しく暴れ回る感情に呑み込まれていく。

さくらは乱暴に席を立った。椅子が倒れて耳障りな音を響かせる。泉の肩がビクツと震えた。

「…：そっだよ。お母さんわかってたんだ。じゃあごはん作ってくれればいいじゃん。でもやらなかったよね。ううん、やらないんじゃないんでできないんだ。そうでしょ？」

⑤泉の表情からも色が抜け落ちた。下唇が震え、なにかを言おうとしているようだった。そんな母の顔をにらみつけ、口を挟ませてたまるかと言わんばかりに大きな声で言い放つ。

「私、お母さんの作ったごはんの味なんて知らない。友達みんなお母さんやお父さんの作るごはん食べてるのに、私はいつもお惣菜かお店のごはんばかりじゃん。みんなと違うんだよ。」

栄養摂れてたらいいつて言ってたけど、ほんとにそうなの？」
決壊したダムのように、言葉が激しく流れ出す。もう止められなかった。

「それでいいのかなって思ったから、自分で作るうって決めたんだよ。私だけでできないことはお母さんにもやってほしかった。だから味噌汁作ったときに手伝って言ったのに、お母さんほんとにちよつとしかやってくれなかったじゃん。コロッケのときだって、一緒に作るうって言ったのにお母さんなんにもしてないうちから無理って言ったよね。それでわかったよ、

A

「さくら、待つて、落ち着いて」

母が必死で制止する声を振り切り、両手で耳を塞いだ。

「お母さんが料理できないことが嫌なんじゃない。チャレンジしないことが嫌なの。私が料理を頑張ろうとしているのもおもしろくないんですよ。全然応援してくれないし反対ばかり…今回だって、成績思ったより悪かったからちよつどいいと思ってるんですよ。だつたらもういい、やめてあげる」

自分の声が耳の奥にひびく響く。頭の中がぐちゃぐちゃになりそうだった。いよいよしつかりと母の顔を凝視する。泉はさくらから目を逸らし、※シンクに視線を落としたまま立ち尽くしていた。そういえば、塾に行く前に使ったフライパンを洗っていなかった。使えばなしの道具を見た母は小言でもよこしてくるだろうか。けれど、今はそれさえもどうでもいい。

「お母さんなんて、大っ嫌い」

言い捨てて廊下へ続く扉を大きく開けた。そのまま立ち去るつもりで、⑥それでもやっぱり母の反応を確かめたくて振り返る。泉は相変わらずシンクを見つめていた。さくらの言葉が届いているのかもわからない。なんにも言わずぼんやり突っ立っている母への怒りがこみ上げ、くるりと※踵を返すと自室へ駆け

込み乱暴に扉を閉めた。

こうすることしかできなかった。本当はけんかなどしたくなかった。けれど⑦長い時間をかけて溜め込んだ暗いもやは、これ以上ひとり抱えていられないほどに大きくなってしまっていたのだ。

(中村汐里 『殻割る音』)

※(文中のことばの意味)

ケトル : 底の平らなやかん。

薫 : さくらと同じ塾に通っている同級生。同じ中学校を

志望しており、さくらのことをライバル視している。

シンク : 台所の流し。

踵を返す : あとへ引き返す。

問1

~~~~~線①②のことはについて、文中における意味として最もふさわしいものを次の中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 脳裏をよぎった

ア 頭に浮かんだ

イ あれこれと考えた

ウ 忘れられなかった

エ 目の前を過ぎた

② 理不尽で

ア 理想と違って

イ 信用できなくて

ウ 筋が通らなくて

エ 聞いていなくて

③ しのぎを削っていた

ア 努力していた

イ 激しく争っていた

ウ 目標にしていた

エ 声をかけ合っていた

問2

——線①「暖かいはずのダイニングに漂うのは凍っていた空気だった」とありますが、具体的にどのような状況ですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あたたかい食事が並んでいるはずの食卓で、さくらは泉に何も料理を作ってもらえずにいる状況。

イ いつもは親子仲良く話す食卓で、泉もさくらもどちらが話し始めるべきかと緊張している状況。

ウ 親子で穏やかに過ごすが、突然泉に怒りを向けられてさくらがふるえ上がっている状況。

エ 家族が集まり楽しく会話するはずの食卓で、泉とさくらが向き合って沈黙している状況。

問3

——線②「その結果がこれ」とありますが、どういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア さくらが勉強をおろそかにして料理に時間を割いたために、模試の成績が悪くなったということ。

イ さくらが勉強せずに自分の好きなことばかりしているので、志望校への合格が絶望的になったということ。

ウ さくらが母にかくれて約束を破ってばかりいるので、料理はさせてもらえなくなるということ。

エ さくらがパソコンでこそと動画を見ていたために、もうパソコンは使わせてもらえなくなったということ。

問4

——線③「置かれた状況を理解してはいたけれど、なんとか取り繕おうとした」とありますが、なぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 母との約束を守らずに母を怒らせているのは分かっているが、自分が勉強も料理も努力している事実を認めてもらえないのは納得できないから。

イ 過去の模試と比べて順位や偏差値が落ちたのは分かっているが、自分は変わらずに勉強しているのに他の者のせいで料理をやめさせられたくないから。

ウ 今回の模試でライバルに負けてしまったのは分かっているが、今まで通り勉強していた自分の努力不足だったとは全く思えなかったから。

エ 志望校への合格が少しきびしくなったのは分かっているが、これからの勉強次第でいくらでも挽回できるだろうと考えていたから。

問5

——線④「コッソソと投げ込まれたひと粒」とありますが、泉のどの発言のことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 約束が違うでしょ。さくらの成績が落ちたことは数字として証明されたんだから料理はやめてもらいます。

イ パソコンといい成績といい、約束もろくに守れないの？前はこんなことなかったのに、料理始めてからおかしくなつたよね。

ウ そろそろ現実を見て受験に集中しなさい。

エ だいたいね、前からずっと言いたかったけど料理料理って一体なんなの？私が作らないことに対する当てつけのつもり？

問6

——線⑤「泉の表情からも色が抜け落ちた」とありますが、この時の泉の心情として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 断念  
イ 失望  
ウ 動揺  
エ 憎悪

問7 A にあてはまることばとして、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア お母さんは私のことが好きじゃないんだって。私が頑張っていること、否定ばかりしてくるんだもん
- イ お母さんって料理できないんだって。作るのが面倒とか嫌いとかじゃなくて、最初から料理を作れないんだって
- ウ お母さんは一回も料理したことないんだって。だから、私が料理作れるようになるの許せないんだって
- エ お母さんって本当に料理するの嫌いなんだって。仕事を言い訳にして嫌いなことから逃げてるんだよね

問8 線⑥「それでもやっぱり母の反応を確かめたくて振り返る」とありますが、この時のさくらの心情として、最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 母にもう一度、勉強と料理を両立するチャンスを与えてもらえるだろうと期待している。
- イ 母を傷つける言葉を口にしてしまい、謝った方がよいかもしれないと反省している。
- ウ 母が料理をしないことに対するさくらの気持ちを理解してくれただのか、気になっている。
- エ 母を挑発するような言い方をしたので、さらに母を怒らせたのではないかと心配している。

問9 線⑦「長い時間をかけて溜め込んだ暗いもや」とありますが、これと同じことをたとえた表現を、文中から十三字でぬき出しなさい。

問10 次の は、ある生徒がこの文章についてまとめたノートの一部です。I・IIにあてはまることばを、それぞれ答えなさい。ただし、Iは文中から十五字でぬき出し、IIは文中のことばを使って十五字程度で答えなさい。

【前半】 泉の怒り

原因① さくらがパソコンを無断で使用したこと

原因② さくらの模試の結果が悪くなったこと

原因③ さくらが約束を守らないこと

約束(1) パソコンを勝手に使わない

約束(2) I (十五字)

【後半】 さくらの怒り

II (十五字程度)

ことが嫌

③ 次の漢字と同じ部首を持つ漢字として、ふさわしくないものをあとから一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ① 地 【ア型】 イ在 ウ坂 エ幸
- ② 得 【ア行】 イ待 ウ後 エ往
- ③ 名 【ア唱】 イ国 ウ問 エ和
- ④ 完 【ア安】 イ宝 ウ究 エ守
- ⑤ 思 【ア愛】 イ情 ウ熱 エ恩

④ 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は読みを答えなさい。

- ① 教室で詩をロウドクする。
- ② 生活習慣が悪いのでカイゼンした。
- ③ あの角を曲がるとおジゾウさんがある。
- ④ 九州へのタビジを楽しむ。
- ⑤ 相手を攻略する作戦をネる。
- ⑥ 祖母は果物の類いが好きだ。
- ⑦ やさしい言葉で説く。
- ⑧ 田舎の老父を養う。
- ⑨ 優秀な結果を収める。
- ⑩ 役者と裏方が表裏一体となって舞台を作る。

これで問題は終わりです。